

# メコン川水資源開発における対立の議論分析

—サヤブリダム建設計画を事例として—

国際協力学専攻

47-126830 室田美鈴

指導教員 堀田昌英教授

キーワード：メコン川委員会・ダム開発・議論ツリー

## 1. 背景

現在、メコン川下流域本流で初となるダムがラオスで建設されている。このサヤブリダム建設をめぐり、ラオスと下流国であるベトナム、カンボジアの間で対立が発生した。

サヤブリダム建設は国際機関の関与がないため、建設計画に関する議論はすべてメコン川委員会(以下 MRC)で行われている。またこの事業で、MRC の意思決定手続きである PNPCA(通知・事前の協議および同意の手順)が初めて実施された。しかし意思決定手続きが行われたにも関わらず、下流国は未だに建設反対示しており、下流国以外にも環境 NGO や研究者もこのダム建設に対する環境への影響を強く懸念している。

## 2. 目的・意義

本研究はサヤブリダム建設におけるメコン川流域国の議論と各国の主張を整理し、議論の構造を明らかにする。議論の構造を明らかにすることで、メコン川における水資源管理における問題点と対立の原因を明らかにすることができる。と考える。

また本研究の提案する手法は今後 MRC で起こりうる係争に適用できると考えている。

## 3. サヤブリダム建設の問題点

サヤブリダム建設計画の問題点はダム建設自体の問題とダム建設の意思決定手続きの問題の2つに分けられる。

ダム建設を実施する際、堆砂・水質・生態系・住民移転といった問題が挙げられる。サヤブリダ

ムでは流し込み式ダムという形式が採用されており、貯水池が小さく、環境負荷が小さい形式といわれている。またダムには環境に配慮した魚道や放水路などが設置予定であるが、実際に機能するかは疑問が残る。

この問題に加えて、サヤブリダム建設計画の最大の問題点はメコン川委員会で初めて実施された PNPCA である。

PNPCA には、内容が不透明な点が多い。そのため、今回の計画では意思決定手続きの合意の有無が今回の対立の最大の原因になってしまった。またメコン川委員会での決定は拘束力がないため、たとえ十分な議論が行われていても、建設国の意向が反映されやすいという状況にある。

## 4. 研究手法

本論文では、議論ツリーを作成しサヤブリダム建設計画の議論を整理する。

データとして、MRC の加盟国4か国(タイ・カンボジア・ラオス・ベトナム)の主要紙の英字新聞からサヤブリダムに関する記事をデータとして扱い、議論分析を行う。

データの期間は、2010年から2013年9月までとし、該当件数は、

ラオス：65件

タイ：6件

カンボジア：81件

ベトナム：10件 となった。

取り上げた新聞はいずれも政府機関紙や国営メディアであるため、政府の意見を反映している。

これらの新聞記事の単語を数値化し、記事間の類似度に基づき階層クラスタリングすることで、議論ツリーを作成する。

議論ツリーを作成することで、議論のすれ違いを可視化できる。すれ違いとは、「論点のすれ違い」と「事実認識の齟齬」に分けることができる。

論点のすれ違いとは、双方の主張や重視する論点が異なっていることである。事実認識の齟齬とは、同じ論点の中で双方の主張の根拠とするデータが異なっていることである。

議論ツリーを作成することで、議論のすれ違いの原因を明らかにすることができる。

## 5. 結果・考察

議論ツリーでは、建設国であるラオスと下流国で反対を示しているベトナムやカンボジアは別の記事クラスタを形成していた。ラオスの記事の多くはダム構造や建設後の環境影響について書かれており、一方下流国では、ダム建設を進める上での手続きに関連した記事が目立つ。そのため、建設国と反対国の論点がすれ違っていることが分かる。

議論ツリーを作成したことで、同じ論点でも、ラオスとカンボジアでは同じクラスタを形成しなかった。その理由として、同じ話題でも、ラオスとカンボジアでは論じ方が異なるという点が挙げられる。カンボジアの論じ方はどの論点であっても、主張の根底に、メコン川委員会での議論不足に対する不満があると考えられる。

したがってカンボジアは「メコン川委員会の手続きの見直しを求めたい」という本音が存在していると考えられる。

また、ラオスと下流国では、メコン川委員会で行われた意思決定手続きに対する事実認識が異なっていることが明らかになった。

ラオスは、メコン川委員会での意思決定手続きは他国の合意を得て終了していると捉えている。しかし、反対国はメコン委員会での意思決定手続

きでラオスの対応は不明確で、合意に至っていないと捉えている。

## 6. 結論・今後の課題

議論ツリーを作成したことで、サヤブリダム建設計画における議論のすれ違いを明らかにすることができた。加えて、カンボジアの本音として「メコン川委員会の意思決定手続きに対する不満」があると考えられる。

今回はメコン川委員会参加国の国家の主張を取り上げた。しかし下流国はラオスだけでなく、メコン川委員会に対する不満や主張も議論も見受けられた。そのため、メコン川委員会は今後、議論の場を明確化させていくことに加え、対立の仲裁など積極的に参加国の議論に関与していく必要があると考える。

## 7. 参考文献

- ① Nhina Le, 2013, Xayaburi and the Mekong Critical Point: Over-Damming the Shared River and Bigger Threats to the Shared Future, University of San Francisco's Peace Review.
- ② Richard P. Cronin, Stimson Center, 2012, Laos' Xayaburi dam project: Transboundary game changer.
- ③ E. Baran, M. Larinier, G. Ziv and G. Marmulla, 2011, Review of the fish and fisheries aspects in the feasibility study and the environmental impact assessment of the proposed xayaburi dam on the Mekong mainstream.